

『優しい畝』作り

公害等調整委員会委員 辻 通 明

休日に天気が良ければ、近くの畑に出かけて、農作業をしています。広さは20坪程で、トウモロコシ、キュウリ、オクラ、ナス等の夏野菜の収穫も終わり、今は、ハクサイ、キャベツ、ブロッコリー等を育てているところです。

若い頃から、趣味らしい趣味も無く、無芸大食を自認していた私ですが、50歳を過ぎて老後の生活のことを考え始めていた頃、「夫の濡れ落葉化」を心配した妻から何度か勧められたこともあり、近くの空き地を借りて、野菜作りを始めることとなったわけです。この空き地というのが、元々窪地を埋め立てて造成された宅地用地ですので、鍬を入れると、タイヤのチューブ、鉄筋やコンクリートの破片等が幾つも現れるという有様で、まずは、土壤の改良から始めなければなりませんでしたが、その後、毎年繰り返す培養土や肥料等を与え続けてきた効果が出てきたのか、最近になって漸く、畑らしくなってきました。

野菜作りの楽しみは、色々ありますが、何といっても、安全（無農薬）で、新鮮な作物の「採れたての味」を賞味できることでしょう。特に、朝採りのトウモロコシやキュウリの美味しさは格別で、その甘さ、食感には「思わず頬もニンマリ」となります。畑に苗を植えた後は、雑草取りや追肥、長雨や荒天時における防護措置など結構大変な作業をしなければなりません。それでも、日々、着実に成長し、果実等が大きくなっていくのを見るのは本当に楽しいことです。収穫直前の畑は、それまでの苦労も忘れてしまうような満足感を味わわせてくれます。

野菜作りで最も大変で、しかも大事なものは、土作りでしょう。作物を収穫した直後の畑は、とても荒々しい雰囲気を持っています。色も黒っぽく、大きな土くれがゴロゴロしており、人間に例えると、何か、疲れきった、気持ちもささくれ立っているようなそんな感じがします。その畑を暫く休ませた後、消石灰や苦土石灰を混ぜ込んでやると、少し穏やかな色の土に変わりますが、さらに暫く休ませ、最後に、堆肥や油粕などの元肥を鋤き込みながら、十分に深く耕し終わると、野菜作りの下準備が整ったことになります。この元肥が鋤き込まれ、畝の形に整地された畑は、何とも言えず優しい色で、土質もサラサラとしており、人間に例えると、優しさとゆとりに溢れ、気力・体力も充実しているそんな風情になります。私の限られた経験に過ぎませんが、このような「優しい畝」を作ることができれば、後は、自然が上手に美味しい野菜を育ててくれると感じています。

最近、子供たちをめぐる悲しい事件が相次いでいますが、これは、社会のあり様が大きく変わり、多くの人たちが、収穫直後の畑のように、疲れきり、精神的なゆとりを失ってきていることの現われではないのだろうか、学校教育制度の見直しも大事なことなのでしょうが、美味しい野菜を育てる「優しい畝」のように、大人も含めて皆が、お互いを思いやる『恕の心』と『ゆとり』を育むような社会になれば、子供達も、自ずと健やかに育っていくのではないかと、土作りをする度に、そんなことを考えています。